哀しみさえも大人の味わい

松本侑壬子・ジャーナリスト

題名のイメージそのままに、これは薫り高い大人のファンタジーのような作品である。女性問題をいかほど含んだという訳ではないけれど、生身を抱えながら老いていく知的で美しく誇り高い２人の姉妹の姿、とりわけその内面の動きを感情の機微に至るまで丁寧に描いた珠玉の作品である。

姉妹を演ずるのはデイム（大英帝国勲位受勲者）の称号をもつ英国きっての２大女優マギー・スミスとジュディ・デンチ。脚本・監督は英ベテラン俳優チャールズ・ダンスで、本作が監督デビュー作とは思えないほど悠々と格調高く仕上げている。

舞台は第二次世界大戦を前にした1936年のイギリス・コーンウォールの海辺の町。緊迫した時代の風をまるで感じていないかのようなのどかな風景の中で、初老に差しかかったジャネット（スミス）とアーシュラ（デンチ）の姉妹が親の残してくれた屋敷と遺産でつつましく暮らしていた。この静かな生活が一変したのは、ある嵐の翌朝以来のことだ。屋敷の下の浜辺に若い男が打ち上げられているのを見つけた２人は、家に運び込み、医者を呼び介抱する。言葉が通じないこの青年（ダニエル・ブリュール）は、実はアンドレアという名前のポーランド人でアメリカ行きの船が難破して遭難したことがわかる。しかも彼はすばらしいバイオリニストだということも。

それまでしんと静かだった屋敷の中に快い活気と美しいバイオリンの音色が満ち、姉妹の生活は才能あふれる年若い異性を中心に張りあいに満ちたものになっていく。とりわけ、妹のアーシュラの胸の奥底には思ってもみなかった感情が芽生える。長い間かなわぬ夢と思い込んでいた“白馬の王子”が海を越えてやってきたのか、と。打ち寄せる荒波を見下ろす岩に座るアーシュラの膝にそっと頭をもたせかけるアンドレア。その髪をなでながら永遠の至福に時を忘れるアーシュラ…。アンドレアは地域の生活にも慣れ、心楽しい3人の“擬似家族”の暮らしが板についてきたころ、その幸せは突然若く美しい“魔女”によって断ち切られる。この辺りをスケッチ旅行中の女性画家オルガがアンドレアに関心を寄せ、世界的に有名なバイオリニストである兄に紹介するからと、奪うように彼をロンドンへと連れ去ったのだ。

まるでギリシャ神話のようにそれぞれの人物の役割がかっちりと決まり、それに伴う喜び、悲しみ、怒り、苦しみ、切なさ、嫉妬、労り、慰めといった感情の機微が激しく柔らかく、手に取るように伝わってくる。奪われた幸福な時は戻らないが、その思い出は永遠である。新しい希望の人生に一歩踏み出したアンドレアの晴れ舞台を確認すると、静かに堂々と会場を去っていく２人の後姿の何というかっこよさ。アンドレアとの思い出の残るラヴェンダー咲くあの庭で再び２人の生活に戻っていく姉妹。哀しさも切なさも、それを人生の深みへと昇華していける知恵と強さをもつのが大人でしょう、と後姿が語っている。

美しいバイオリンの音色が印象的。アンドレア役のブリュールはバイオリンの特訓1ヵ月で撮影に臨んだというが、実際の演奏は人気バイオリニストのジョシュア・ベルによる。いい香りの中でゆったりと上質なお菓子を堪能した気分になる。

シネマ女性学

イギリス映画（105分）／ チャールズ・ダンス監督

●

『 ラヴェンダーの咲く庭で 』

６月４日より、Bunkamura ル・シネマにてロードショー